

その 14

房総の山辺赤人と

田子の浦



鋸南町 HP から

山部宿禰赤人、不尽山を望む歌一首〈併せて短歌〉

「天地(あめつち)の 分れし時ゆ 神(かむ)さびて 高く貴き 駿河なる 不尽の高嶺を 天(あま)の原 振り放(さ)け見れば 渡る日の 影も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も い行きはばかり 時じくそ 雪は降りける 語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 不尽の高嶺は」

(天と地が別れた時から、神々しくて高く貴い駿河の国の富士の高嶺を、大空はるかに振り仰いで見ると、空を渡る太陽の姿も隠れ、照る月の光も見えない。白雲も進みかね、時ならず雪は降っている。語り伝え言い継いでゆこう。この富士の高嶺は) 山部赤人(巻 3・317)

柿本人麻呂と並ぶ歌聖山部赤人の「不尽の山」の長歌である。この反歌(巻 3・318)が、「日めくり万葉集」の万葉秀歌ベストワンの「田子の浦」の歌で、すでにその 6 に載せているので、ここでは割愛する。

前回書いたように、この赤人の歌の後に、高橋虫麻呂の「不尽山の歌」の長歌(巻 3・319)と反歌 2 首(巻 3・320、321)を、「類を以てここに載す」と左注を付けて載せている。その長歌と反歌(321)の「天雲も い行きはばかり」と、赤人の長歌の「白雲も い行きはばかり」と符合する表現を使って、2つの歌は互いに対をなしている。

虫麻呂の歌、そして赤人の歌、ともに、眼前に聳える神の山「不尽山」の威容を捉えてさすがである。万葉集には、「不尽山」を詠んだ歌が他に 6 首、計 11 首あるが、この 2 人の歌が抜きん出ていることは言うまでもない。当時の大和の人々は、そのほとんどが不尽山を仰ぎ見ることはなかった、不尽山を見ることのないまま死んでいった。そこで、不尽山の歌を聞き、或いはその歌を読んでは、不尽山がどれほど大きく気高い山かということを知る。不尽山がどんなに神々しく秀麗な山かを悟る。都人は、これらの歌、とりわけ赤人と虫麻呂の歌を読んでは不尽山に尽きせぬ憧れを抱いたのであろう。

ところで、この赤人、歌聖と称えられた山部宿禰赤人とどのような人物だったか？ 実は、神亀・天平期の歌人というだけで、史書には全く登場しないことから、その生没年や出身地、その後の来歴などほとんど分から

ない。身分の上では、五位以下の下級官人として天皇の行幸に従駕して、天皇を讃賀する歌や自然、風物の美しさ、清冽さを詠ったことから叙景歌人とも呼ばれている。万葉集には、長歌 13 首、短歌 37 首、合わせて 50 首を残している。そして、「古今和歌集」の序は、柿本人麻呂と並んで、赤人を歌聖として称え、また、大伴家持は、それぞれ山部の「山」と柿本の「柿」とって、「山柿の門」として敬っている。「山」は山上憶良を指しているのでは、という説もあるが、現在は山部赤人説がほぼ定説となっている。その没年は、天平 8（736）年頃、当時大流行した疫病、鬼病で亡くなったのではという説が通説となっている。

ところが、この通説を全面的に否定する伝承が千葉にあった。この赤人、鬼病で亡くなったのではなく、「千葉」で長寿を全うしたというのだ。その証として、千葉に古文書や墓まで残っているというのである。なぜ千葉か？そもそも、この赤人、確かに古来から上総国の出身という説がある。その言い伝えのもとになったのが、藤原定家とともに「新古今和歌集」の編纂にあたった飛鳥井雅経を祖とする飛鳥井家の古文書『古今抄』に、「赤人は上総国山辺郡の人なり」と書かれていたことによる。西行法師も赤人ゆかりの地として上総を訪れており、少なくとも、この赤人伝説は平安時代末期までさかのぼることができるのである。この赤人上総出身説は地元でも昔から根強くあったようで、上総国は山辺郡の生まれということから、この地では、名前は「山部」ではなく、「山辺」赤人と書かれてきた。多くの資料が、「山部赤人、別に山辺赤人とも称す」と記す所以である。そして、晩年は上総に帰って、鬼病で亡くなるどころか、長命で天寿を全うし、今もその墓が千葉にある、というのだ。

そこで早速、赤人の墓とされる「赤人塚」に行ってみた。かつての山辺郡山辺村は、現在の東金市田中。その名の通り田んぼの中に、一本の榎の木が立ち、その下に「赤人塚」があった。「赤人塚」と書かれた石碑の脇には、「田兒之浦 打出而見者 真白衣 不盡能高嶺尔 雪波零家留」と彫られた歌碑があった。赤人の「田子の浦」の歌の万葉仮名による原文である。



赤人塚

この赤人塚を管理しているのが、同じ田中にある日蓮宗法光寺である。法光寺には、「赤人塚」と同じ文化年間に作られたとされる「山辺赤人坐像」があり、現在は東金市の指定文化財となっている。市の文化財の記録には、次のように記されている。

「この像は田中の法光寺に安置されている。像高 18.1 センチで、檜の一木からの丸彫で彩色されている。像はゆるやかなふくらみを見せ、ゆったりとした印象をうける。特に笑を含む顔の表情は、なかなか巧みで精緻を極め、まさに 1 首を歌い出そうとするかのような歌聖の姿が、この小像のうちによく捉えられている。作者は不明であるが、おそらくこの地に赤人伝説が起った文化年間（1804～17）頃の作ということができる。なお、この像は秘蔵とされ普段は公開されていない」。



山辺赤人像
(法光寺蔵)

出自が不明の歴史上の偉人については、各地にいろいろな伝承が残る。赤人についても例外ではなく、赤人終焉の地とされる所がいくつかある。滋賀県東近江市下麻生町には、山部赤人を祭神として祀る山部神社と、それに隣接して山部赤人が生涯を終えた地とも伝わる赤人寺（しゃくにんじ）がある。かつてこの地は蒲生野と呼ばれ、赤人の代表作の 1 首、「春の野に すみれ摘みにと 来しわれぞ 野をなつかしみ 一夜寝にける」（巻 8・1424）の歌を詠んだとされている。また、奈良県宇陀市榛原（はいばら）山辺には、赤人の墓と伝わる五重石の塔がひっそりと建っている。そこには、「山辺赤人の墓」という看板が立てられ、次のような説明文が書かれている。「万葉集に数多くの秀歌を遺した歌人、山辺赤人の墓地と伝承されている。ここにいつの頃にか建てられた五輪の石塔、いかにも古そうに風化している。伝承そのままが真実であるかは詳らかではないが、ここ大和富士の南斜面に人家の散在する文字通りの山辺の村に、山辺赤人が葬られていると、古くから村人は信じて疑わない」。この説明文に、「伝承そのままが真実であるかは詳らかではない」と書かれているように、住職も、「あくまで供養塔で、墓地ではないと思います」という付言まで付いているが、村人は懇ろに赤人を祀っているという。他に、三重県鈴鹿市山辺町には山辺の御井（みゐ）という旧跡があり、その近くに赤人の屋敷跡もあるという。

万葉集に所縁のある畿内近辺に、このような伝承が残るのは納得いくが、都から遠く離れた辺境の地、東国の上総国に同様の伝承が残ることになると、やはりその意味合いが異なってくる。なぜ、上総なのか？それを追っていくと、さらに驚くべきもう 1 つの伝承があった。そもそも千葉の赤人塚に、代表作とはいえ、なにゆえに駿河の「田子の浦」の歌碑があるのか？その答えは思いがけないものだった。それは、歌に詠まれた田子の浦は駿河ではなく、房総にある、というのである。田子の浦が房総に？はい、房総に田子の浦があった。

かつては上総国、千葉県安房郡の鋸南（きよなん）町の勝山海岸から標高 70 メートル程上がったところに田子台という台地があり、そこには弥生時代の遺跡があることで知られている。そして、その周辺の海が田子の浦と呼ばれており、上総出身の赤人が詠った田子の浦は、実はこちらの田子の浦だというのだ。最近アップされたばかりの鋸南町のホームページにも、房総田子の浦説について次のように記されている。

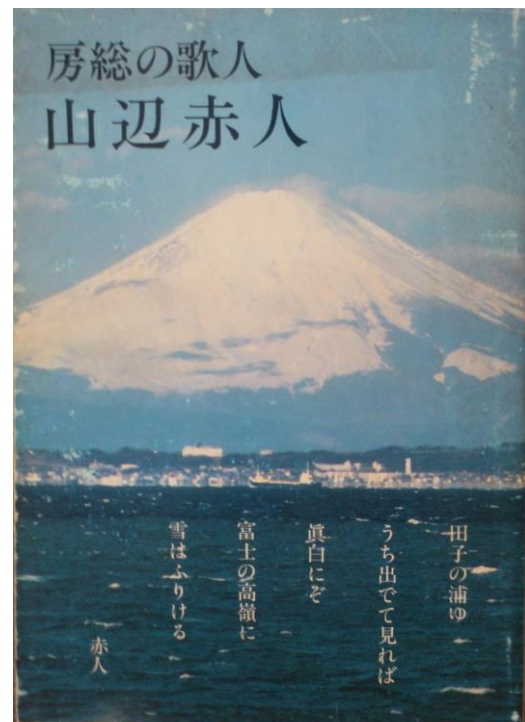
「赤人が詠んだこの歌の田子の浦とは、古来、駿河国蒲原、由井あたりの海岸とされてきました。しかし安房国の田子台のある勝山海岸であると主張した人物がいます。江戸時代後期の神代学者、山口志道です。明和 2（1765）年長狭郡吉尾村（現在の千葉県鴨川市）に生まれた志道は、51 歳の時、（略）言語学と神道哲学を合わせたような神代学を創始しました。百人一首を研究した志道は、その著『百首正解』の中で、『山部赤人は上総山辺郡の産なり、故に赤人の富士を望むといふ歌は安房田子の浦にて詠まれし歌なり、安房郡海辺の総称を鏡が浦といひ、この海に富士の影をうつす故に名とす、右の海辺に田子といふ所あり、その下を田子の浦といふ、赤人ここより富士を望みて詠まれし歌なり、田子の浦といへば駿河にのみありとおもふは東海道に近きのいひなり』と述べています。たしかに内房の海岸からの富士のすばらしさは格別ですし、鋸南町には田子という地名があり、そこは上総と安房をつなぐ古代の官道が通っていたと言われます」。

かつての古東海道は、相模から海を渡って上総につながっていた。従って、房総半島が、下ではなく上、つまり上総国となったのだが、その上総の官道は海の道で遠く都につながっており、赤人は、富士を見ながら都に上って行ったことも十分あり得るのである。また、地元の小学校では、赤人は、ここで「田子の浦」の歌を詠んだと教えられ、子供たちはそう信じてきたという。子供たちが歌った田子の浦の歌である。

「田子の浦べのはるかなる 清き雄々しき富士ヶ嶺の 千古の姿学びつつ つとめ励まんわが健兒童」。

千葉県銚子市の医師で歌人の江畑耕作氏は、赤人について日本全国丹念な調査を行い、その結果、山部赤人は上総国の山辺赤人であるとして、平成 5（1993）年、『房総の歌人山辺赤人』を刊行した。本稿の執筆にあたっては、同書を一部参照させてもらったが、同書の表紙が右の写真で、房総の田子の浦から見た海越しの富士の高嶺は見事としかいう他ない。まさに、「田子の浦に出てみれば、富士の高嶺は真っ白に雪が降っている」のである。

この江畑氏の労作は、その調査の最後に貴重な資料を発掘することになる。旧山辺郡と旧武射郡が合併してなった山武郡下で、江畑氏は、山辺姓の、とある旧家を探し出していた。



江畑耕作『房総の歌人山部赤人』の表紙

赤人塚がある東金市の隣町、現在は山武市成東町の山辺家を訪ねると、当主の山辺進氏は、古くから分家を作らないという家訓があるため、この地方で山辺を名乗るのは1軒だけだったと、山辺家の歴史を語り始めた。そして、進氏は、そんな山辺家に永く伝わる古文書を出して見せてくれた。幅20センチ、長さ3メートルの巻軸の古文書で、「権景園書」と表記された山辺家52代の系図だった。誤字や難解な個所が混じった和漢混合文で書かれていたが、江畑氏は、その書き出しの文章に驚く。読解した大意は、「山辺大明神は住吉大明神の再現であり、薬師如来が神となって現れたものである。和歌の道に入って悟りを得た如来は歌道の御神現で、(略)この山辺大明神は世人に赤人と云われた人である」と、あったという。山辺赤人である。系図では赤人を初代とし、その赤人は、「天平宝字六壬寅年六月八日、齢九十七歳で逝去、山辺大明神に祀られる」と書かれてあったという。江畑氏も、それまでは、赤人は鬼病で死亡したと想定していたが、これ以後は、上総に帰郷して隠遁、古文書にあったように97歳という長命でその生涯を閉じたのではないかと推定するのであった。

江畑氏の調査からすでに30年近くが経っている。そこで、江畑氏や山辺家はその後はどうなっているかを取材したところ、江畑氏は2018年に亡くなり、山辺家当主山辺進氏も10年以上前に逝去していた。そして、その当主を継いだ子息も亡くなられたため、詳細は不明で、家系図等古文書の所在を確認することができなかった。

いずれにしても、史書に赤人の記述がない以上、赤人がどこに生まれ、どこで没したかについては、これからも解明されることは難しい。赤人が、それぞれの地で、それぞれの人々の心の中で生まれ、生き、そしてその生を閉じたことが、赤人の生涯だったのでは、とすることができよう。少なくとも、山辺赤人が上総に生まれ、房総の田子の浦で万葉秀歌ベストワンの歌を詠み、上総でその生涯を閉じたという赤人伝説は、今に生きている。赤人は、今も赤人塚に眠り、山辺大明神として、また坐像となって現世を見つめている。

最後に、「田子の浦」房総説に因み、しばし「海越しの富士」の写真をご覧いただきたい。相模湾から上総にわたる古東海道から見た富士山の雄姿、他ではなかなか見ることができない「海越しの富士」は迫力満点。まさに葛飾北斎の浮世絵「浪裏富士」、そのものである。赤人もこのような富士を見たのだろうか？



「美しい日本を撮ろう」コンテスト
「富士遠望」(撮影:滑方清)